

第34回秋田県学校体育研究大会の発表を終えて

保健体育科 山本正敏

1 はじめに

「生涯にわたって豊かなスポーツライフを実現する資質や能力を育てる」ことは高等学校を卒業した子どもたちの目標となっている。豊かなスポーツライフを送るための「基礎を培う」ことは、12年間の体育学習を通して子どもたちに育んでいかなければいけない資質の一つである。

そこで、今大会の研究課題は「豊かなスポーツライフの基礎を培う体育学習」であり、大会テーマとして位置づけた。これまで各郡市研究会が積み上げてきた研究実績を活用し、前回大会の成果と課題を引き継ぎながら研究を進めることができたと考えている。

「豊かなスポーツライフ」の実現のためには、運動の楽しさや喜びを味わおうとするとともに、自己の状況に応じて体力の向上を図ることができ、また、公正・協力などに対する意欲が高まっていなければいけない。このような運動に親しむ資質や能力を育てることで、心と体を一体とした指導及び実生活に生きる指導の充実を図ることができる。生涯にわたり運動やスポーツに親しみ、健康な子どもたちを育成することにつながると考え、「運動に親しむ資質や能力を育てる体育学習」が本大会の研究主題として設定された。

2 授業提示

運動をしすぎている生徒と運動を全くしない生徒の2極化が話題となり、かなりの月日が過ぎていく。体育の授業以外で運動をする機会が全くない高校生は、男子で6割以上、女子に至っては8割を超えているそうである。つまり転んだときに、反射的に手を出せず、地面

に顔を叩きつけてしまう子どもが増えている現状にも納得がいく。それだけに、学校教育における科目『体育』の役割や重要性を改めて感じさせられるデータでもある。

今回は、現行の学習指導要領で新しく領域として設定された「体づくり運動」の授業提示であった。「体づくり運動」は「体ほぐしの運動」と「体力を高めるための運動」から成り立っている。小・中学校、高等学校で目標が異なるとはいえ、運動に対して積極的・自主的・主体的に取り組み、卒業後も運動に関わっていこうとする態度を育てるというものである。まさに、現状の高校生が抱える課題の解決をねらいとしている。また、実技科目でありながら、技能の観点では評価しないという特徴がある。「体づくり運動」では、授業の中で技能を身につけたり、運動量を確保したりすること以上に、卒業後に重点を置き指導することが大切である。この考え方は、他の領域にも生かすことができ、今回の発表で学んだことの一つである。

3 おわりに

2年間を見通した指導と評価の計画を作成し、指導内容の系統性を大切に学習過程を構想することができた。生徒一人一人が、運動の楽しさや喜びを味わうことができるようにするためには、生徒の実態に応じた「学習活動に即した評価規準」の設定と指導方法の工夫が必要であった。

事前に、小学校や中学校の研究授業を拝見する機会が多くあり、小・中学校の先生方と系統性について意見交換するなど、貴重な経験をさせていただき、ありがとうございました。

第3学年C組 体育科学習指導案

期 日：平成26年11月 6 日
指導者：教諭 山 本 正 敏
場 所：秋田市立体育館

1 単 元 名 体づくり運動

2 単元の目標

- (1) 次の運動を通して、体を動かす楽しさや心地よさを味わい、健康の保持増進や体力の向上を図り、目的に適した運動の計画や自己の体力や生活に応じた運動の計画を立て、実生活に役立てることができるようにする。(運動)
 - ア 体ほぐしの運動では、心と体は互いに影響し変化することに気付き、体の状態に応じて体の調子を整え、仲間と積極的に交流するための手軽な運動や律動的な運動を行うこと。
 - イ 体力を高める運動では、自己のねらいに応じて、健康の保持増進や調和のとれた体力の向上を図るための継続的な運動の計画を立て取り組むこと。
- (2) 体づくり運動に主体的に取り組むとともに、体力などの違いに配慮しようとする、役割を積極的に引き受け自己の責任を果たそうとすること、合意形成に貢献しようとするなどや、健康・安全を確保することができるようにする。(態度)
- (3) 体づくり運動の行い方、体力の構成要素、実生活への取り入れ方などを理解し、自己や仲間の課題に応じた運動を継続するための取り組み方を工夫できるようにする。(知識、思考・判断)

3 単元と生徒

(1) 単元について

体づくり運動は、体ほぐしの運動と体力を高める運動で構成され、自分や仲間の心と体に向き合って、体を動かす楽しさや心地よさを味わい、心と体をほぐしたり、体力を高めたりする領域である。高等学校では、中学校までの学習を踏まえて、地域などの実社会で生かすことができるようにすることが求められる。

生徒が体を動かす楽しさや心地よさを味わい、体づくり運動の学習に主体的に取り組む、体力などの違いに配慮し、合意形成に貢献することなどに意欲をもち、健康や安全を確保するとともに、体力の構成要素や体づくり運動の実生活への取り入れ方などを理解し、自己の課題に応じた運動を継続するための取り組み方を工夫できるようにすることが大切である。

(2) 生徒について (男子21名、女子19名 計40名)

第3学年流通経済コースで学んでいる40名のクラスであり、第2学年から同じメンバーである。運動が得意で体育の授業に積極的な男子と、運動に対して消極的で体育の授業以外ではほとんど運動することがない女子が在籍しており、運動する生徒とそうでない生徒の二極化傾向が見られる。

この学年は現行の学習指導要領に対応しておらず「体づくり運動」に対する学習経験が浅いため、第2学年では、新体力テストの測定結果を参考にして運動の組み合わせ方を工夫したり、生活習慣の改善を目的に計画を立て運動に取り組んだりしている。また、自己のねらいに応じた運動の計画と実践により、体力を向上させるための運動の種類、強度、量、頻度の選び方を学んでいる。

第3学年では、すでに2回の運動計画と実践を行っているが、11月になり、ほとんどの生徒が部活動を引退し、体力や生活環境が変化し始めている。その変化に応じて、運動との関わり方や運動計画を見直して運動に取り組むことで、実生活で継続的に運動が実践できるようにする。

(3) 指導について

第3学年の体育は3単位であり、体づくり運動は10時間設定している。その10時間の授業時数を3-3-4に分割して実施している。

体を動かす楽しさや心地よさを味わうことができる場面を毎時間設定し、実生活に役立てることに主体的に取り組めるようにしている。

グループで計画の分析や修正を行うことで、課題解決に向けて自己の考えを述べたり仲間の話を聞いたりするなど、グループの話し合いに責任を持って関わろうとすることができるようにしている。

自己に応じた目標の設定、目標を達成するための課題の設定、課題解決のための運動例の選択とそれに基づく計画の作成及び実践、新たな目標の設定といった過程があることを理解できるようにしている。また、計画と実践を繰り返すことで、卒業後においても自己の課題に応じた運動を継続するための取り組み方の工夫や、生活環境の変化を考慮して定期的に運動の計画を見直すことができる能力を育成したい。

4 単元の評価規準【第2学年及び第3学年：体づくり運動】

	関心・意欲・態度	思考・判断	運動の技能	知識・理解
単元の評価規準	体づくりの運動に主体的に取り組むとともに、体力の違いに配慮しようとする こと、役割を積極的に引き受け自己の責任を果たそうとすること、合意形成に貢献しようとするなどや、健康・安全を確保して、学習に主体的に取り組もうとしている。	自己のねらいに応じて、健康の保持増進や調和のとれた体力の向上を図るための継続的な運動の計画を立てるとともに、自己や仲間の課題に応じた運動を継続するための取り組み方を工夫している。		体づくり運動の行い方、体力の構成要素、実生活への取り入れ方などを理解している。
学習活動に即した評価規準	①体づくり運動の学習に主体的に取り組もうとしている。(2年) ②実生活に役立てることができるよう、体力などの違いに配慮しようとしている。(3年) ③役割を積極的に引き受け自己の責任を果たそうとしている。(2年) ④合意形成に貢献しようとしている。(3年) ⑤健康・安全を確保している。(2年)	①体ほぐしのねらいや体力を高める運動の考え方を踏まえて、継続しやすい体づくりの運動の計画を立てている。(3年) ②自己や仲間のねらいや体力の程度に応じて、適切な運動の種類、強度、量、頻度を選んでいる。(3年) ③仲間と学習する場面で、自己や仲間の危険を予測し回避するための活動の仕方を選んでいる。(2年) ④体づくり運動を生涯にわたって楽しむための実生活で継続しやすい自己に適した行い方を見付けている。(3年)		①体づくりの運動の行い方について、理解したことを言ったり書き出したりしている。(2年) ②体力の構成要素とそれらが健康に生活するための体力と運動を行うための体力に密接に関係していることについて、理解したことを言ったり書き出したりしている。(2年) ③実生活への取り入れ方について、理解したことを言ったり書き出したりしている。(3年) ④課題解決の方法について、理解したことを言ったり書き出したりしている。(3年)

5 指導と評価の計画（第2学年7時間、第3学年10時間）

学年	時数	学習活動	関心・意欲・態度	思考・判断	知識・理解
第2学年	1	1 オリエンテーション	①体づくり運動の学習に主体的に取り組もうとしている。	③仲間と学習する場面で、自己や仲間の危険を予測し回避するための活動の仕方を選んでいる。	①体づくりの運動の行い方について、理解したことを言ったり書き出したりしている。
	2	2 体ほぐしの運動	③役割を積極的に引き受け自己の責任を果たそうとしている。		②体力の構成要素とそれらが健康に生活するための体力と運動を行うための体力に密接に関係していることについて、理解したことを言ったり書き出したりしている。
	3	3 体力を高める運動	⑤健康・安全を確保している。		
	4	4 自己分析 (新体力テストより)			
	5	5 生活習慣の確認			
	6	6 全身持久力・筋持久力の向上			
	7	7 柔軟性の向上			
	8	8 敏捷性・巧緻性の向上			
	9	9 グループの作成			

学年	時間	主なねらい・学習活動	学習活動に即した評価規準（評価方法）			
			関心・意欲・態度	思考・判断	知識・理解	
第 3 学 年	1	1 オリエンテーション （昨年度までの振り返り） 昨年度までに学習した具体的事項について確認し、今年度の学習の見通しを立てる。 2 コース選択・グループ編成 自己の体力や生活に応じたコースを選択し、グループを編成する。 3 グループ目標設定				
	2 3	グループ目標に応じた、運動計画を立てよう				
		1 体ほぐしの運動 仲間と協力して課題に挑戦する運動や、仲間が安心して活動できるように緊張をほぐしたりして、お互い失敗を恐れず積極的にチャレンジすることによって、仲間を大切に感じたり信頼で結ばれたりするように交流する。 2 運動計画Ⅰの作成 グループの目標に応じて、適切な運動計画を立てる。	2時間目 活動1 ↓ ④合意形成に貢献しようとする。（観察）	3時間目 活動2 ↓ ②自己や仲間のねらいや体力の程度に応じて、適切な運動の種類、強度、量、頻度を選んでいる。 （学習カード）		
	夏季休業（運動計画の実践）					
	4 5 6	個別目標に応じた、より継続可能で日常化できる運動計画を立てよう				
		1 体ほぐし・体力を高める運動 2 運動計画Ⅰの分析・修正 3 運動計画Ⅱの作成 ～より個別・より継続～	4時間目 活動1.2 ↓ ②実生活に役立てることができるよう、体力などの違いに配慮しようとしている。（観察）	5・6時間目 活動3 ↓ ①体ほぐしのねらいや体力を高める運動の考え方を踏まえて、継続しやすい体づくりの運動の計画を立てている。 （学習カード）	4・5時間目 活動2 ↓ ④課題解決の方法について、理解したことを言ったり書き出したりしている。 （学習カード）	
	9月～10月（運動計画の実践）					
	7 8 9	個人目標に応じた、より生活化できる運動計画を完成させよう				
		1 体ほぐし・体力を高める運動 2 運動計画Ⅱの分析・修正 3 運動計画Ⅲ ～より実生活～ 4 運動計画Ⅲの相互評価		7・8時間目 活動2.3 ↓ ④体づくり運動を生涯にわたって楽しむための実生活で継続しやすい自己に適した行い方を見付けている。（学習カード）	8・9時間目 活動3.4 ↓ ③実生活への取り入れ方について、理解したことを言ったり書き出したりしている。（学習カード）	
	10	1 運動計画の完成 2 確認テスト 3 単元のまとめ 体づくり運動の学習を振り返り、実生活に役立てることができるような見通しをもつ。				

6 本時の展開（7／10時間）

(1) 本時の目標

- 実生活に役立てることができるよう、体力などの違いに配慮できるようにする。
(関心・意欲・態度)
- 体づくり運動を生涯にわたって楽しむための実生活で継続しやすい自己に適した行い方を見付けることができるようにする。
(思考・判断)
- 体づくり運動の実生活への取り入れ方について、理解したことを言ったり書き出したりしている。
(知識・理解)

(2) 学習過程

主なねらい・学習活動	教師の働きかけ・評価（☆）
1 集合整列・挨拶 出欠確認・健康観察 2 本時の目標や学習内容の確認	
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 0 auto;"> ～より実生活で継続しやすい運動計画に修正しよう～ </div>	
3 体ほぐし運動・体力を高める運動 <ul style="list-style-type: none"> ・仲間と協力して課題に挑戦する運動を行う。 ・交流を意識して実践する。 4 運動計画の分析・目標の見直し <ul style="list-style-type: none"> ・2か月間の取組状況から、運動計画を分析する。 5 運動計画の修正 <ul style="list-style-type: none"> ・より実生活に役立てる内容に修正する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・主体的に仲間と交流できるように学習に取り組ませる。 ・時間設定、道具の種類、運動強度等の分析ポイントを提示する。 ・体力や生活習慣の変化を考慮させ、必要に応じて目標を見直させる。 ・実生活で継続しやすいバリエーションを考えさせる。
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 0 auto;"> ☆体づくり運動を生涯にわたって楽しむための実生活で継続しやすい自己に適した行い方を見付けている。(思考・判断) </div>	
6 修正案の共有化 <ul style="list-style-type: none"> ・自分や仲間のねらいに応じた運動の行い方や計画について評価や改善を図る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・個人の分析結果を発表し、運動計画をグループで実施する。 ・工夫点や改善点などの情報を交換する。
7 本時のまとめ <ul style="list-style-type: none"> ・片付け・振り返り ・次時の学習内容の確認 	<ul style="list-style-type: none"> ・仲間と協力し合うことが、運動を楽しみながら継続できることにつながることを確認する。
8 集合整列・挨拶	

2014サイエンス・リーダーズ・キャンプに参加して

数学科 野呂 耕一郎

1 サイエンス・リーダーズ・キャンプとは
サイエンス・リーダーズ・キャンプ（SLC）は、独立行政法人科学技術振興機構（JST）が主催し、JSTと実施協定を締結した機関が各プログラムの実施・運営を担当し、夏季休業の期間中、全国の中学校、高等学校、中等教育学校等の理数教育を担当する教員に、先進的な研究施設や実験装置がある研究現場で実体験し、第一線で活躍する研究者、技術者等から直接講義や実習指導を受けることなどを通じて、最先端の科学技術を体感させるとともに、才能ある生徒を伸ばすための効果的な指導方法を修得させる合宿形式のプログラムである。

プログラムへの参加を通じて、教員の理数教育における指導力の向上を図るとともに、将来、スーパーサイエンスハイスクール（SSH）等の関係施策においても指導的立場で活躍するなど、地域の理数教育において中核的な役割を担う教員となるための素養を身につけさせることを目的としており、さらに、地域の枠を超えた教員間のネットワークが形成されることもねらいとしている。（JSTのWebページより）

2 2014SLCについて

参加は昨年度から公募となり、今年度は全国5会場で行われたが、私は8/21~24に東京理科大学で行われた「体験を通じた最先端の理数系総合指導力の向上」というプログラムに参加した。秋山仁先生をメインの講師に東京理科大学の数学科の先生が講師として参加される高校数学対象のキャンプということで応募した。参加者は北は函館から南は沖縄まで25名が参加した。SSH指定校の教員が比較的多く、課題研究等に意欲的に取り組んでいる教員が集まった。主な日程は次の通りである。

1日目 秋山仁先生の講義「数学を体験させる教授法」、「数学教育の現状と課題」についてのグループワークが行われた。

2日目 前日のグループワークについて各グループから発表、昨年度開館した「秋山仁の数学体験館」の見学と秋山仁先生自身による展示

内容の解説、秋山先生がこれまでに使用した「教具」の作製をした。

3日目 前日作製した「教具」の授業での活用についてのグループワーク、動的図形ソフト「GeoGebra」による数学体験実習、最先端の研究をされている東京理科大学の3名の先生によるパネルディスカッション、藤嶋学長の講演「理数分野の研究の広がりとおもしろさ」が行われた。

4日目 前日の教具を活用した授業のグループワークから授業案を作成し、その授業をグループごとに行ってビデオに収録した。そのビデオを見ながら各グループがプレゼンテーションを行い、全体での協議を行って終了した。

1日目と3日目に夕食を兼ねた交流会があり、秋山先生はじめ每晚多くの先生方と交流し、全国の様々な事例を聞くことができた。盛りだくさんの内容であったが、意欲のある先生方の参加でどのプログラムも内容の濃いものとなり、最終日はやや疲れが残るものの全員充実した様子であった。

今回のSLCは盛りだくさんであったが、その中で今最も私が記憶に残っているのが実は藤嶋学長の講演である。現在72歳で学長であり、さらに現役の研究者であり、「光触媒」という分野での最先端の研究の第一人者ということである。講演で藤嶋学長が「光触媒」の研究に携わることになったきっかけから現在研究中のトピックスまで、また小さい子供から高校生までどのように科学に興味を持たせることができるのかについての先生なりの私案について、さらに「光触媒」の分野における今後についてわかりやすく解説していただいた。講演は藤嶋学長の「本当に科学はおもしろい、ぜひ多くの子供たち、生徒たちにこのおもしろさを味わってもらいたい」という熱意が伝わってくるものであり、圧倒された。この講演で私も数学・科学への興味や取り組みを新たにした。藤嶋学長の他に3名の東京理科大学で数学の最先端の研究をされている先生のパネルディスカッションもあり、このように最先端の研究をされている方の話を直接聞くというのも大きな効果があると感じた。

平成26年度 指導主事学校訪問における 研究授業学習指導案と各科協議会及び全体協議会

教 務 部
平成26年10月3日(金)
11時30分～16時30分

日 程

- | | | |
|------------------|-------------------|---------------------------------|
| 1. 11:30 ~ 11:50 | 学校経営説明 | |
| 2. 12:00 ~ 12:50 | 4校時 授業参観 | |
| 3. 13:30 ~ 14:20 | 5校時 研究授業(国語科・家庭科) | |
| | 授業者 | 国語科(1B) 那須 淳子
家庭科(1E) 佐々木ひな子 |
| 4. 14:45 ~ 15:35 | 各科協議会 | 国語科 <会議室>
家庭科 <語学室> |
| 5. 15:45 ~ 16:30 | 全体協議会 | <会議室> |

訪問指導主事

秋田市教育委員会学校教育課	指導主事 主査	長谷山庫之 先生
秋田市教育委員会学校教育課	指導主事 主査	堀井 淑子 先生
秋田市教育委員会学校教育課	指導主事 主査	大月真由美 先生
秋田県教育庁高校教育課	指導主事(国語科)	加賀谷英一 先生
秋田県総合教育センター	指導主事(家庭科)	浅沼 和子 先生

国語科（国語総合）学習指導案

日 時：平成26年10月3日（金）5校時
 対象クラス：1年B組
 授業者：那須 淳子
 使用教科書：『高等学校 国語総合』（明治書院）
 場 所：1年B組教室

1. 単元名 竹取物語

2. 単元の目標

- (1) 我が国最古の作り物語としてのおもしろさに触れ、古典に親しむ態度を養う。
- (2) 場面や人物の心情を的確に読み取り、内容・主題を把握する。

3. 生徒の実態

男子19名、女子21名のクラスである。意欲的に取り組む生徒が多く、和やかな雰囲気の中で授業を進めることができる。しかし、思考の内容をわかりやすく文章表現したり発表したりすることを苦手とする生徒も少なくないので、工夫しながら表現力をつけていきたい。

4. 単元の指導計画（全7時間）

- (1) 「かぐや姫の生ひ立ち」の読解と内容理解 … 4時間
- (2) 「かぐや姫の嘆き」の読解と内容理解 … 2時間（本時2／2）
- (3) まとめ（感想と発表） … 1時間

5. 本時の計画

- (1) ねらい 登場人物の言葉や表現を手がかりに心情を読み取り、人間像をとらえる。
- (2) 学習過程

	学 習 活 動	指導上の留意点	評価の観点
導 5 入 分	・前時の学習内容を振り返り、本時の目標を確認する。	・本時の活動について、プリントを配布して確認させる。	・学習に向かう姿勢ができているか。(A)
展 開 40 分	・本文を音読する。 ・かぐや姫の心情、翁の心情を、本文の言葉を手がかりに読み取り、プリントに記入する。 ・読み取ったことを発表する。 ・かぐや姫の人間性がどのように描かれているか、既習の「かぐや姫の生ひ立ち」と比較して考える。 ・グループごとに考えをまとめ、発表する。	・教師の後に続いて全員で斉読させる。 ・心情を表す表現を抜き出させ、係り結びや反語等の特徴に気づかせる。 ・数人を指名し、発表させる。発表の際は根拠を述べさせる。 ・かぐや姫が人間味のある存在として描かれていることに気づかせる。 ・きちんとした文章の形で発表させるようにする。	・表現を手がかりに心情を読み取れたか。(D) ・かぐや姫の人間像が理解できたか。(D) ・積極的にグループ活動ができたか。(A)
ま 5 と 分 め	・本時の学習内容を振り返り、次時の学習活動を確認する。	・「竹取物語」を学習した感想を書き、発表することを予告する。	

【評価の観点】 A 関心・意欲・態度 B 話す・聞く能力 C 書く能力 D 読む能力 E 知識・理解

国 語 科 協 議 会

日時：平成26年10月3日（金）14:45～15:15

場所：会議室

司会：大関 記録：石井

◎授業者：那須先生（国語科）感想

授業者：竹取物語は中学校でやっているの、高校でどう料理をするのかというのが本日の授業の目的だった。

主 旨：前の時間で語句や読み等をおこなったので、本時は中身を突っ込んでいき、表現からつかむ。

- ・思うように進むことができなかった。
- ・グループ作業もなぜ行ったのか、自分でも疑問に感じた。
- ・最後はあわててしまった。

（参加者の感想）

船木教頭：・本文を丁寧に読んで登場人物の心情を理解することができた。

- ・文法を学ぶ意味も意識しながらやっていた。

渡辺：・細かく的確な指示だった。

- ・読解力がないと筆者の考えを読み取ることができない。

櫻庭：・返事をして立っている姿を見て、単語で答える生徒がいたので一文で答えさせたほうがいいのではないだろうか。

戸田：・分量があるものを一回で扱えるのがよかった……補助プリントについて

- ・生徒に緊張感があつたのではないだろうか。
- ・最後の場面、ガイド的なものがあつたほうがよかった。

石田：・生徒が動く場面がたくさんあつた。

- ・時間が止まった場面があつた。……時間配分の工夫

倉光：・文章を読み解く力がない。

- ・生徒がたんたんとおこなっていた。

三浦：・生徒と先生との信頼関係があつた。

- ・個々には一生懸命おこなっていた。
- ・※グループの人数は少ない方がよかった。
- ・根拠を持ってきちんと伝えていた。

奥山：・やることがしっかり生徒に伝わっていた。

- ・内容を深め、おもしろさを伝えようとしていた。

大関：・生徒への指示が細やかで的確。

- ・板書の字が素晴らしい。
- ・根拠をふまえてきちんと心情を読み取ることができた。
- ・どうしても指導案どおりにやらなければいけないという意識を持ってしまいが、指導案どおりでなければならないのか。（状況によって途中で終わったり変更があつたりしてもい

いのではないか。)

※三浦先生の授業の感想より討議

◎グループ活動の時間をしぼり、人数は少数のほうがいいのではないか。

那須：いつもグループ活動をおこなうときは、6～7人でやらせている。

戸田（英語）：4人グループ ただし、必要に応じて人数は変更。

三浦（国語）：4人グループ

船木教頭（国語）：4人グループ

堀井秋田市教育委員会指導主事

- ・高校時代にやった経験が大人になって生きてくる。
- ・内現化する力を身につけてほしい。
- ・心に残る授業。
- ・立って音読させたのがよい。
- ・もっと声を出させなければいけないのではないだろうか。
- ・話させる授業をやってほしい。
- ・小学校では3人グループ……体だけで机は動かさない。

加賀谷秋田県教育委員会高校教育課指導主事（国語）

- ・音読でスタートした点がよい。
- ・丁寧に追っていた授業であった。
- ・生徒が受け身になっていた。
- ・本文の理解が不足していた。
- ・内容が生徒に伝わっていたのかどうか。
- ・テーマの設定がどうだったか。……考えてみたくなるようなテーマ。
- ・テーマ設定を冒険してもよかったのでは。……いろいろな考えが出てくるテーマ設定。
- ・指示を明確にしてほしい……話し合っどうするか。
- ・リーダーを決める……グループ内で→話し合いがうまくいく。

家庭基礎 学習指導案

日 時：平成26年10月3日（金） 4・5校時
 対象クラス：1年E組
 授業者：佐々木 ひな子
 使用教科書：「家庭基礎 自立・共生・創造」（東京書籍）
 場 所：調理室

- 1 単元名** 食生活「食事と栄養・食品」
- 2 単元の目標** 栄養、食品、調理、食品衛生に関する基礎的な知識と技術を習得し、食生活を健康で安全に営むことができる能力を養う。
- 3 生徒の実態** 意欲的に授業に取り組んでおり、食生活に対する興味・関心も高い。問題意識の持ち方や知識・技術の定着には個人差があるため、授業をとおして考えさせ、体験させる活動が必要である。

4 単元の指導計画（全13時間）

- | | |
|--------------------|----------------|
| (1) 食生活について考える | … 1時間 |
| (2) 食事と栄養・食品 | … 5時間（本時5 / 5） |
| (3) 食生活の安全と衛生 | … 1時間 |
| (4) 生涯の健康を見通した食事計画 | … 1時間 |
| (5) 調理の基礎 | … 4時間 |
| (6) これからの食生活 | … 1時間 |

5 本時の計画

- (1) ねらい ①飲み物と健康の関係について考えることができる。
 ②計量・加熱など基本的な調理技術を身につける。
- (2) 学習過程

	学 習 活 動	指導上の留意点	評価の観点
導入 10分	<ul style="list-style-type: none"> ・生活のどんな場面で水が使われるか考える。 ・本時の目標を確認する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・教科書を使いながら確認させる。 	
展 開 80分	<ul style="list-style-type: none"> ・4種類のミネラルウォーターと水道水を味わう。 ・硬水と軟水で紅茶を淹れ、違いを観察させる。 ・紅茶に砂糖を加え、自分好みの甘さでは砂糖をどのくらい使うか確認する。 ・飲み物についてのアンケート結果から、問題点を話し合う。 ・硬水と軟水に石けん、合成洗剤を溶かし、違いを観察する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・硬水と軟水の特徴を説明してから、飲み比べを行う。 ・沸騰状態を正しく見分けられるよう指導する。 ・実技テスト：計量スプーンの使い方 ・「食品群別摂取量のめやす」による砂糖の望ましい摂取量と比較させる。 ・食事バランスガイドから、望ましい水分摂取の方法を考えさせる。 ・合成洗剤が誕生した背景について説明する。 ・排水は回収する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・計量スプーンの使い方を正しく身につけることができたか。(C) ・自分の改善点を見つけ、まとめることができたか。(A・B)
整理 10分	<ul style="list-style-type: none"> ・本時の内容を振り返る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・プリントにまとめを記入し、知識の定着を確かめる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・本時の学習内容を正しく理解できたか。(D)

【評価の観点】 … A 関心・意欲・態度 B 思考・判断・表現 C 技能 D 知識・理解

家庭科協議会

日時：平成26年度10月3日（金）

司会：小林 克

記録：舟木 志保

1. 授業者から（佐々木ひな子先生）

時間が足りなかった。昨年の甲子園での体験（水を飲む習慣のない生徒がいたこと）から、この授業を思いついた。たくさんの種類の飲み物への興味喚起、糖分に目を向けることを目標としていたが、ねらいを明確にできなかった点が反省点である。また、本時の目標は生徒自身が見つけるべきではないかと思うところがあるが、みなさんはどのように提示しているのか。留意点があれば、教えてほしい。

2. 参観者から

- ・保坂潤子ーにこやかに生徒を引っ張っていくなど、ひな子先生の人柄がよく表れていた授業だった。言語活動も見られ、生徒が意見を発表する場がきちんと設けられていた。沸騰の見極めなど、本時の授業は調理実習の事前授業ともとれた。生徒は生活経験が少なく、常識的な点が身につけていないことがあるが、それを振り返る良い機会となったのではないかと思う。
本時の目標については復習もかねて、1人の生徒を指名し、答えさせるところからスタートし、授業の重要点を本時の目標にしている。
- ・保坂 徹ー体験から作る授業が生徒の心に響くと感じた。
本時の目標は、目に見えることが良いと思う。また、提示するタイミングも大事だと思う。
- ・松本ーTTがあった方が実習しやすいのではないかと思った。本時の目標は今日やることを示すことが多い。
先生が話をしている時、ノートをとっている生徒がいなかったが、それはなぜか？
- ・佐々木ープリントに後でまとめさせる予定だったが、時間がうまくとれなかった。
- ・佐藤寛仁ー保健の授業と関連する部分があるので、興味深く参観させていただいた。
本時の目標は導入後、流れを理解させてから示すようにしている。やはり、提示するタイミングが大事だと思う。
- ・山本ー砂糖を入れていく段階で、自分にとって紅茶がおいしく飲める砂糖の分量はどのくらいか、考えさせてもおもしろいかなと思った。
本時の目標は明確な目標を立てづらい单元もあるので、「今日の目標は何だったと思う？」などの問いかけをし、生徒に目標を見つけてもらうようにしている。生徒の気づきを大事にしている。
- ・鎌田ー特別教室だったが、パワーポイントを活用したりなど、教室をうまく使っているなと思った。教室を変えて授業を行うことで普段できない形でのアプローチも可能になると思った。

-
- ・畑沢－実技からまとめに入るとき、なかなかメリハリをつけられない生徒がいた。その時の指導が難しいと思った。
 - ・高橋－お湯を沸かすとき、生徒が全員立って取り組んでいた点が良かった。パワーポイントを使って、授業が行われていた。ICTを自分の授業の中にも活用していきたい。
 - ・舟木－生徒の発表に対する先生のフィードバックが必ずあり、生徒が意見を述べやすい雰囲気が作られていた。生徒への声のかけ方など、参考になった。
 - ・小林－炭酸ジュースの砂糖が多くてどのくらいの量だったのか、目で確認したいと思った。

3. 指導主事からの助言

- ・長谷山指導主事－特別教室での授業ということもあり、生徒もいきいきしていた。目標は生徒に見通しを持たせる上でも提示の必要があるのではないかと思う。「授業の前後で考え方が変わったよね。」「教科の中でこの体系はどこに位置するのか。」授業の前後での生徒の思考の流れを比較し、学習させたかったことを印象づけるのも一つの方法ではないかと思う。
- ・大月指導主事－「今日の授業は指導要領解説のどの部分か。」「本時で身につけさせたかったことは何か。」教師が示すねらいと、子どもに示す課題と、評価がすべて一体化していなければならない。「めあてを常に示す必要はないのではないか。」との声もあるが、教師側が何を身につけさせたいかビジョンを持つことが大事である。
- ・浅沼指導主事－明るいキャラクターで生徒を惹きつけながら授業を進めていた。実技の部分と栄養バランスの部分を組み合わせ、ミネラルウォーターを取り扱うというところは、提案性があった。家庭科の授業は実践的体験的な学習活動を通して行うという点が、教科の特質である。今日のように体験的な場面を設けながら、理解を図ること、小中高共通して授業への参加意識を持たせることが大事である。その点で生徒を動かし、様々なことを体験させながら、何かを感じさせることができるような活動が盛り込まれた授業になっていたと思う。学んだことが当事者意識につながっていけば良いと思う。また、1学年分アンケート調査をし、まとめるというのは非常に大変な作業であるが、自分のことを知るという意味でも、生徒にとっては興味深いものだったと思う。生徒もよく動いていたし、先生の声も大きく、大変良かったが、1時間の授業の中で、生徒が1回でも頭をひねる場面があれば、なお良いのではないかと思った。ねらいを明確にすることが課題であったように思う。学びの必要感、今日の授業で身につけさせたい力を意識させるという意味でも、教師がねらいをしっかりと考え、ビジョンを持つことが大事である。

指導主事学校訪問全体協議会

日時：平成26年10月3日（金）15:45～16:30

場所：会議室

司会：船木教頭 記録：石井

1. 指導助言 秋田県教育庁高校教育課指導主事（国語）加賀谷英一先生

○生徒が立派だった。明るい、大きな声で挨拶をしてくれた。あいさつは社会生活の基本。

○授業の中の生徒指導を継続してほしい。

◎キャリア教育と授業改善

本校の生徒の合言葉「秋商1・2・3（ワン・ツー・スリー）」は

自己実現と社会貢献の大きな志を持って、1人の生徒が学習と部活動の2つを3年間継続し、充実させて学校を巣立ってほしいという意味で、非常にわかりやすい。

●授業が重要……部活と生徒の学習とを有機的に結びつけるのが授業。

- ・授業では学習から得られる基礎的・基本的な知識。
- ・部活動を通して育成される社会性などをお互い結びつける。
- ・将来の社会的・職業的自立に向けて必要となる力を継続的に身につけさせていくことが必要。

●授業をどう改善していくか？

言語活動の充実に関する指導事例集（高等学校版より）

5つの提言 ①一斉授業だけでなく、ペアで意見交換をする。

②付箋を使って話し合う。

③先生が説明するだけでなく、生徒が説明をする。

④板書をノートに写すだけでなく、レポートにまとめる。

⑤ICTを活用する。

- ・毎時間、説明型・講義型の授業だとどうしても個別の知識の説明と暗記の学習になってしまう。そういう状況から抜け出さないと本来の意味の学力、とりわけ思考力・判断力・表現力などといった力は身につかない。同時にもっと新しい勉強をしてみたいという学習意欲も育たない。
- ・現在は大学教育も変化してきている。どんな環境でも答えのない問題に対して、最善の解を導くことができる力を養わなければならない。こういった力が今の大学生にはやや欠けている。そしてまた見方を変えると、高校教育に対するメッセージでもある。
- ・物事を俯瞰して全体の本質を見抜く力や授業から得た知識を実践に生かす力を身につけさせるにはどうすればいいかが課題である。

◎重要なポイント

高校の授業の中で学ぶ手立てを身につけさせ、考えさせる。

今までは効率的に授業を進めていくのが中心だったが、これからは一時的に詰め込んで、そのあとすぐ忘れてしまうような知識は役に立たないという認識に立つ。

毎日の授業の中にほんの少しでもいいので、生徒の知的好奇心をくすぐるエッセンスを盛り込んでほしい。学ぶことが楽しいから、今やっていることが将来の仕事や生活に生かせるから、自ら進んで学ぶといった、自律的な学習へ意識を転換していくことが必要。そういう取り組み

を教科単位で組織的に行ってほしい。個人技ではなく、教科で。

組織で授業をブラッシュアップしていくことにより、秋田商業高校の授業は楽しく、そして力がつくという評価を確立して、魅力ある学校にしてほしい。

県内唯一の単独の商業高校としてこれからも厳しくも温かい教育活動を展開して、本校の生徒をさらに伸ばしてほしい。

2. 総評 秋田市教育委員会学校教育課指導主事主査 長谷山庫之先生

○生徒のあいさつがさわやかで清々しかった。2年前にも来校し、そういうイメージを持っていた。

○秋商スタンダードというエッセンスが確実に受け継がれている。

○学校の様子がわかるホームページで、学校が躍動感にあふれているのが伝わってきた。

○今後も情報発信に努めてほしい。

◎キャリア教育と学校改善

●平成24年度の有識者会議において

故進藤隆校長先生が県内唯一の商業高校として、時代の流れに応えるためには、秋商キャリア教育の充実がなければならないと熱く語った。

●キャリア教育の発端は？

新卒者・ニート・フリーター対策の問題として、それを解決するもの、若者の雇用問題が日本経済を停滞させる社会ブームをひきおこすだろうということが出てきた。実は統計上、新規学卒者のフリーターというのは減少している。

今、問題になっているのは25～34歳くらいの、いわゆる年長フリーターだ。

今の新卒者に対してのキャリア教育は違ってきているし、現状とはずれてきている。

●法政大学の教授の話から

文科省のデータ、厚労省の調査から推察した結果、高校入学者が100人いたとすれば、高卒、大卒、専門学校も含めて、新卒で就職して3年後も続けて働いている人は41人しかないという計算。

※ストレーター……高校に入ってそのまま就職までストレートに進む。

我々が描く学校を卒業し、就職して同じ職業にずっと定年まで勤めあげるというモデルは50%を切っておりもう標準ではない。平均モデルはない、あるいは、なくなりつつあるのが現状。つまり学校の頑張りによって、商業高校を含め、新卒者のニート・フリーター対策はある程度成果を上げてきている。現実としては景気回復が理由ではなかろうか。

しかし、就職してからの離職にも問題がある。果たして、これを子供個人の責任としていいのだろうか、子供を単に責めるのでいいのか。

●帝国データバンクの調査において

日本の会社の平均寿命は30年。ということは、普通に新卒で会社に就職しても定年まで同じ会社で勤め続けられるというのは容易なことではない。

●価値観を育てるキャリア教育

数年前小学校に入学した子供の65%は、彼らが大学を卒業する時、今はまだ存在していない仕事に就くだろう。つまり、小学生は今の仕事でないものに就く可能性が高い。社会は今、激しく変化しているし、産業構造・就労環境が従来と異なっている。高校3年生等の現在地から

未来を予測して、その予測に基づいて生徒達を特定の職業や進路に当てはめていくというマッチングのみを考えているキャリア教育では不十分だ。

大事なのは、その子供がどういうことで役割を果たしていきたいのかを見極め、価値観を育てていくことだ。

軸がしっかりしていれば次に向かっていける。やりたいこと、つまり自分の能力プラス自分がやるべきことの価値観、軸をしっかり育てていかなければならない。

そういう視点から秋商キャリア教育というものは、すべて網羅している。総合的な全教育活動を通じたキャリア教育を推進することがキャリアアンカーをより強固なものにして、激しく変化する社会に対応する能力が身についていくのではないだろうか。自信を持って秋商キャリア教育を充実させていってほしい。

さらに

- ・小・中・高、連携したキャリア教育を考えてほしい。
小・中でどのようなキャリア教育を行っているのかを理解し、系統性を考慮してほしい。
- ・教科とキャリア教育の関連について、実学、商業教育だけでなく、普通教科であっても学ぶことの意義や役割を正しく認識させるのが大事である。教科とキャリア教育の基礎的配能力との関連を整備・分析してほしい。
- ・キャリア教育の冊子の中の文言が少しわかりづらいと感じる。子供達が見ても理解できるような文言にしてもよい。

◎授業参観をしての感想

- ・子供達に見通しを持たせることが大事。授業の始めに、導入の段階で何をやるのかを明示するべき。
- ・例として、小・中での発問の仕方は、子供の思考を動かす。子供達をいかに育てるか、どういうふうに授業に引きつけていくか。それぞれ先生方の専門性を持ってしっかり見識を持って考えてほしい。

◎いじめの対応

- ・困っている子供がいたら助ける、手を差し延べる。

◎交通事故防止

- ・具体的な例を挙げて指導をしてほしい。

3. 校長より

本校でも年間を通じて授業改善ということテーマにし、生徒にどのような力をつけさせたいのかということを進んできた。今後も継続して授業改善に向かっていきたい。

- ①言語活動の充実、一斉授業を本気になって見直す必要がこれからはあるのではないだろうか。
- ②高校の指導主事の先生方からは、毎年、いろいろな話を聞くが、小・中の指導主事の先生方からは初めて聞いた。いろいろなことが高校とは違う。
- ③キャリア教育・授業改善、自分のやりたいこと、価値観をしっかり生徒に持たせる。将来の、激しく変化する社会に対応できる子供をつくる。
- ④見通しを持たせた授業をやらなければいけない。

発問の仕方については、小・中学校の先生方に比べて、高校の先生方は少し経験不足。

※今日の研修を通じながら、最後は子どもに返る。我々は授業力を身につけなければいけない。

家庭科の協議会に参加し指導主事から勉強になったことがあった。

1. 本時の目標を提示しただけではだめだ。

授業の前と後で生徒が身についたことは何であるかということを生徒自身ができるような授業でないとだめだ。

2. 本時につけさせたい力は何であるか、授業の構成を身につけなければいけない。

3. 授業の中で1回、頭をひねる時を設ける。要するに考えさせる。

途中でじっくり考えさせる時間を我々は持っていないと実感した。

以上のことを心に留めて授業力をつけていきたい。